

第12回公開講演会「植物たちの生き方に学ぶ」 が開催されました



会場いっぱいの来場者



田中 修 先生

シニア自然大学校 第12回公開講演会演題「植物たちの生き方に学ぶ」が講師甲南大学特別客員教授 田中 修先生により2月2日大阪歴史博物館講堂で行われました。講演は植物に興味のある方が多いのか、新聞にも講演開催の記事が載った為なのか、前評判が高く多数の方の申し込みがありました。事務局には250人の定員に対して540人の申し込みがあり、多数の方に出席お断りの連絡をしなければなりませんでした。

開催日、開場は1時30分と予定されていましたが、1時過ぎには多くの来場者が見えており、受付を済ませて入口あたりに待機していました。会場に入るとステージで田中先生は準備万端整え待機し、ステージ下で先生の著書を販売されていて希望者にサインをされていました。講演会の開始にあたり、大学校から説明、講座生募集の案内、金戸副代表理事の挨拶と続き、田中先生の講演が始まりました。

狂い咲きの桜

最初、季節を意識されたのか、冬芽から入りました。桜が春咲く機序の説明から植物のしたたかな生き方を展開されました。それは厳しい冬を迎える準備、冬を検知するシステム（アブシシン酸の生成）、春を検知するシステム（ジベレリンの消長）それらを経て春に見事桜が咲くことを、その機序で秋に桜が季節外れに咲くことの説明もされました。それは明るさを検知する葉っぱが塩害やムシに食べられて無くなった時に「狂い」咲くことも、又その機序はしっかりと寒さ（冬）を経験したとき著明に現れると説明されました。



冬芽

鮮やかな花の色



春桜が咲く仕組み



セクシーな花



イタドリ

生物進化の過程から、今ある植物の姿を説明されました。地球が出来たのは46億年前、発生した初期の生物は海中に住んでいたが、しばらくして陸に上がった。しかし、陸地は強い紫外線により発生した活性酸素が生存に悪影響し、生物には生き辛いところであった。その紫外線により発生する活性酸素対策として植物内にビタミンC、ビタミンE、カロテノイド、ポリフェノール（代表アントシアニン）などの抗酸化物質を蓄える。更に花の中に出る次世代につなぐ実を守るために色鮮やかな花を咲かせいる。虫を色香で誘う花はきれいに、美しく、可愛くなるが、本来、虫などの助けによって花は子孫を残す生殖器である。花が最もかけてほしい褒め言葉は「キレイ、可愛い」ではなく「うわあーセクシー」だろうと笑いを誘っていました。ほんとそう思います。

帰化植物

海外から日本に入って来て定着している植物は多く、ドクダミ、ツメクサ（シロツメクサ）、オオキンケイギクなどがありますが、日本から出て行って帰化植物となり、海外で嫌われている植物もあります。イタドリは花が可愛く観賞用として欧米に輸出されたのですが、今では嫌われ者の帰化植物になっています。地下茎で増える植物で一度定着すると処置は大変で、対策にかなりの経費が必要となっていると、日本では問題になるほど増えないのはイタドリマダラキジラミがこれを餌としているからで、最近イギリスでは生物農薬として採用されてイタドリ対策をしているそうです。

他に、植物と刺激、花の咲く時期を利用して時間を知らうとした花時計、動けない植物のしたたかな生き方、若者の犠牲になって生きるヒイラギ人生、ホップの苦味が認知症に効果があるとか枝豆の話と楽しい話が続きました。当日の来場者は274人（会員133人、講座生29人、一般112人）でした。

（広報 石原）